

K. A.

ウィットフォーゲルの中国革命論（その2）-毛沢東の台頭と第二次統一戦線の形成と崩壊をめぐり（上） -

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 知章 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/14818">http://hdl.handle.net/10291/14818</a>

## K. A. ウィットフォーゲルの中国革命論 (その2)

— 毛沢東の台頭と第二次統一戦線の  
形成と崩壊をめぐり (上) —

石 井 知 章

はじめに

1. 農村ソヴェトの成立と毛沢東の台頭
2. 毛沢東の虚像と実像
3. 国民党との関係性における毛沢東
4. 毛沢東の「湖南報告」とコミンテルンの農業政策
5. 毛沢東主義と「日和見主義」の展開
6. 中国共産党の発展とその主な特徴 (1927-1935年)
7. 農村根拠地と毛沢東の革命戦略
8. 蒋介石に対する評価の変化と毛沢東の立場  
(以上が本号)
9. コミンテルン第七回大会と抗日「民族」統一戦線
10. 西安事件 (1936年) と段階的調整
11. 第二次国共合作における中国共産党の政策の変化 (1937-1945年)
12. 独ソ条約と毛沢東の「新民主主義」論
13. 「社会主義」国家としての執政党への道 (1945-1949年)

おわりに

(以上が次号)

はじめに

K. A. ウィットフォーゲルにとっていわゆる中国共産党の「毛沢東戦略」とは、1960年代まで通常理解されていたような、ソ連を中心とするマルク

ス・レーニン主義の正統史観からは外れた「異端」の独立路線のことではなく、むしろソ連共産党やコミンテルンの方針に「忠実に」従って定着していったものである。それゆえに、ウィットフォージェルの中国革命論は、いかなる共産党の発展もそれらを国際共産主義運動のモスクワ・センターたるコミンテルンとソヴェト政府、そして究極的にはソ連共産党との関係において見た場合にのみ、完全に理解できるとの立場にある。ソ連共産党とコミンテルンとの関係では、たしかに両者は本来的に別個の組織であり、ソ連共産党は形式的にはコミンテルンの一部に過ぎないとはいえ、実質的にはソ連共産党がその支配者として、コミンテルンとソ連政府との関係を少なからず反映するものとなっている。このためウィットフォージェルは、もっぱら中国の政治過程のみに依拠して中国革命を論じるのではなく、利用し得るあらゆる文献によって、コミンテルンとソ連政府との関係の第一次性を強調するというアプローチをとっている。しかも、ウィットフォージェルの研究姿勢の独自性とは、ブルジョア（民主主義）革命という観点に立った際、これまでの中国共産党の正統史観とはまったく逆に、中国においては共産党ではなく、むしろ国民党こそがその最も重要な役割を果たしていた、という仮説を論証する点にある。中国共産党と国民党は統一戦線で二回合作したものの、二回とも分裂と内戦に終わっているが、いったいなぜ失敗に終わったのか。

また、当時のソ連や中国という全体主義的体制の下においては、最高権力はややもすれば一つの「指導的中心」に集まる傾向があった。中国共産党を中心的アクターとする中国革命のプロセスで、1930年代以降この地位を占めたのは、いうまでもなく毛沢東である。彼がこのような役割を果たすに至ったその個性と起源とは、いったいいかなるものだったのか。また、毛沢東はいかなる指導的資質を中国革命の最初の段階において発揮できたのか。

これらのことを明らかにすべく、中国共産党成立（1921年）後のウィットフォージェルの主な関心は、1923年から27年までと1937年から45年までの間の、二つの統一戦線時期に向けられる。ここでは主に、前稿（『K. A.

ウィットフォーゲルの中国革命論——「アジア的復古」と労農同盟の崩壊めぐり<sup>1)</sup>に引き続き、その数少ない中国革命論の一つである『中国 Kommunismus 小史』(*A Short History of Chinese Communism*, 1956)に内在しつつ、なおかつ他の周辺の文献によってさらに関連情報を補足しながら、毛沢東の台頭(1920年代)と第2次国共合作(1937年から45年)、及び中華人民共和国成立(1949年)に至る政治過程を、ウィットフォーゲルがいかに考察、分析したか、さらにその抑制された記述にいかなる問題意識が隠されていたかに焦点を当てる。

## 1. 農村ソヴェットの成立と毛沢東の台頭

1927年4月の上海クーデタの直後、コミンテルン執行委員会第八回拡大総会が採択した「中国問題に関する決議」(1927年5月)は、「革命が今後発展し、民主主義革命から社会主義革命への転化という過程の開始を示すようになった場合には、労働者・農民・兵士代表ソヴェットの創設が必要となり、ソヴェット樹立のスローガンが党のスローガンとなるであろう」と指摘した。だが、すでに完全にスターリンのコントロール下にあったにもかかわらず、コミンテルンは1927年6月にはまだ、中国共産党が国民党左派と結んでいる間にソヴェットを作るという考え方を否定していた。ウィットフォーゲルの見るところ、これは明らかに農村と都市に全国的な革命が同時に起る見通しを言外に述べたものである。中国の共産主義者が武漢から追放された二週間後に、スターリンが出した声明もまた、新しい革命の波が「必ずしも二ヵ月後とはいわないが、六ヵ月後、あるいは数年後の近い将来に起きて、労働者や農民の代表のソヴェットを作る問題が、そのときのスローガンとして活発な論議的となろう」と予測していた。

だが、その数日後、共産党の将校に率いられた国民党左派部隊が、国民党中央に反逆し、中国の農村に権力の根拠地を作りはじめた。これは急速に得

た都市での足がかりよりも、じっくり農村で権力の腰を落ちつけるのに好都合となった。同年8月1日には、さきの武漢軍の将校であった葉挺と賀龍の二人が、江西省の首都南昌を占領していく。彼らは間もなくこの都市の放棄を余議なくされたが、中国の農村を南下して行く途中、さまざまな社会的不満を抱く農民を説得しながら自分たちの陣営に参加させていった<sup>2)</sup>。

革命がまだ都市で一つの足がかりも得ていないにもかかわらず、ソヴェトを創立して農村での基礎を固めるべきか否か、モスクワの指導者たちは数週間の間、決定を下すのをためらっていた。それはそうした考えが、国民党左派と基本的に両立しないことを十分、彼等が分かっていたからであると見られる。こうしたなか、1927年7月15日の国民党中央執行委員会会議では、ついに共産党の排斥が討議され、8月14日には武漢政府の南京政府への統合が決議されるに至る。だが、8月9日のコミンテルンによる「中国共産党の政治任務と戦術についての決議」は、革命はなお国民党の下層部と協力することによって推進されるであろうとの楽観的希望を表明していた。ウィットフォージェルによれば、この決議はある種の「代案」をも示しており、「もし国民党を変えることができず、またもし革命を別に進展させねばならないことになったら、これまでのソヴェトに関する宣伝スローガンを変更して、速かに戦いを開始して、直ちに労働者、農民、及び職人 (artisans) のソヴェトの組織に邁進せよというスローガンに切替える」ことを示すものであった<sup>3)</sup>。

ところが、事態は思わぬ方向に進んだ。葉挺と賀龍の軍事行動 (南昌暴動) は、「地方だけでもソヴェトがそれなりに作れるという示唆をスターリンに与えてしまったのである」。スターリンは9月27日、葉挺と賀龍が「中国共産党の提唱にもとづいて農民革命運動に加わった」としつつ、「新しい革命の波の昂揚につれて、この運動はコミュニストの指導するソヴェトを先頭に立て、その周囲に労働者と農民を結集させる主要な勢力となることができるし、また現実にそうなるであろう」と述べていた<sup>4)</sup>。かくしてスターリンは、

「ただ工業の中心地がソヴェトを作り得る段階に達したあとでのみ」農村ソヴェトを作り得るという主張をしなくなった。そして、中国の労働者と農民の次の結集地点は、コミュニストによって指導された革命兵士と、革命的農民の結合によって作られた農村ソヴェトになるであろうと主張していった<sup>5)</sup>。

かくしてコミンテルンを中心とする共産党の最高戦略家たちは、中国の村落ソヴェトが生まれつつあることを歓迎した。だが彼らは、それ以上に、この新事態が都市に拡大されることを希望した。葉挺と賀龍は南昌を放棄したあと、その兵力を結集して弱い攻撃をかけていた。彼らは汕頭に接近しつつあったので、コミンテルンは、同市やその他の都市、とくに広東を取るよう圧力をかけた。中国共産党員で、後に脱党した李昂は、当時の状況について、「コミンテルンは、每日一、二通の電報を送ってきて、広東やその他の都市で反乱を起すことを勧めた。（中略）しまいには彼らは、たとえ失敗することがきまっても、反乱を起すことが必要だといってきた」と述べている<sup>6)</sup>。

葉挺は1927年9月24日、実際に汕頭を取ったものの、長く持ちこたえることはできなかったし、広東をソヴェト化する企てもうまくいかなかった。新しいコミンテルンの代表ハインズ・ニューマンによる指導の下、同地方のコミュニストが12月11日、広東省の首都にソヴェト政府を作った。だが、わずか3日後、その「広東コミューン」は、自らの流血の中で溺死した。ウィットフォーゲルによれば、これは明らかに、モスクワでの権力闘争を背景にして起きたできごとであり、「4月と7月の中国共産党の敗北後、トロツキー派からその『日和見主義的』中国政策を猛烈に攻撃されているスターリンにテコ入れしようとして、夥しい犠牲が払われた」結果である。「非共産党系の観測者は、12月の流血の惨事がなぜ、この前年の春と夏に中国共産党が人命と威信をともに失墜したことのつぐないになるのかと、不思議に思うかもしれない。しかしこれは、明らかに中国のコミュニストは、妥協もするが攻撃もできるのだということを示すためにとった方針の表れであった。1927年～28年の冬、コミンテルン内においてトロツキーの反対が沈黙したので、

スターリンはこのことを一層容易に行ない得たのであった」<sup>7)</sup>。いいかえれば、それまでのコミンテルン内部での独自の判断で決断されていたはずの諸政策・決定が、じつはトロツキーら反対派との政争を背景にしていたという事実を裏付けている。

中国共産党は1930年、コミンテルンの指導者から、再び近くの都市を攻撃するよう促されたが、その企図が失敗すると、あたかも1927年の失敗のスケープゴートとして陳独秀が使われたように、早速その身代わりの犠牲者が選ばれた。当時、中国共産党の指導者であった李立三は、「陳独秀の左遷を特色づけたのと同じくらい激しいデマゴギー」によって、はっきりと追い落されたのである。それゆえに、ウィットフォージェルは、「陳独秀と李立三には、小さな独自の行動については罪されるべき責任があったが、李立三が『李立三路線』の責任であるというのは、陳独秀が『陳独秀日和見主義』の責任者であるというのと同様に、いい過ぎである」と指摘している<sup>8)</sup>。

ここで、この二人の元指導者間の政治的立場の相違については記しておく価値がある。ウィットフォージェルの見るところ、「陳独秀と違って李立三は、公然と、またトロツキー派と結んで、スターリンやコミンテルンを批判しなかった。彼は何の抗議もせず、当時明らかにソ連の計画に一致した、政策を行なったことに対する責任をとった。したがって、彼の『誤ち』がモスクワのコミンテルン極東委員会で再検討されたのち、彼は名誉あるコミュニストとしてモスクワに留まった。彼は15年後、中国に帰り、控え目に再び中国共産党の活動に参加した」<sup>9)</sup>。

ここで、ウィットフォージェルにとって、李立三の個人的運命よりももっと重要なのは、この事件のもつもう一つの側面である。モスクワの指導者が1930年、都市の奪取を主張したとき、彼らはけっして「農村ソヴェト」を無視しようとしたわけではなかった。例えば、同年夏のソ連共産党第十六回大会でモロトフは、「革命は重大段階にある。プロレタリアートは農民を指導しようとしなくて、農民が革命を都市をもってこようとしている」と批判

的に言及している<sup>10)</sup>。27年の危機を経たこの段階では、本来の労働者を中心とする労農同盟はすでに根源的に崩壊していたからこそ、こうした新たな事態の形成も容易に可能となったのである。さらに1930年7月23日、コミンテルンの中央委員会政治局は、「戦う大衆はそのごく初期には工業中心部を占領することはできない。ただ革命闘争がさらに進んだ段階においてのみ、プロレタリアートに指導された、農民の戦争は新しい領域に拡大することができる。ゆくゆくは、政治的、軍事的情勢のいかんによって、一個ないし数個の政治的、工業的中心部を占領することができよう」<sup>11)</sup>とし、すでに革命の主体が労働者ではなく、農民にこそ求められはじめていた。

このように、すでにこの時点でコミンテルンは、労農同盟の本来のあり方を自ら否定したばかりでなく、いわば「前近代的」農民の論理で「近代的」労働者（bürger＝市民）の居住する都市を占領しようとしていたことが分かる<sup>12)</sup>。ウィットフォージェルの見るところ、「そのころ農村ソヴェトに重点を置く政策がしりぞけられて、工業中心部や一般都市地域を占領する政策が強調されている点から見て、共産党の戦略家たちが、1930年には、彼らが1927年の終りから1928年にかけてとっていたような、あれかこれかの路線をとっていなかったことに注目するのは重要なことである」<sup>13)</sup>。なぜなら、農村ソヴェトが政権を奪取する全面闘争の上で重要な資産であるかどうかの問題については、1927年9月30日の『プラウダ』の社説と、さらにその1年後、第六回コミンテルン世界大会の直前にモスクワで開かれた中国共産党第六回大会によって、「肯定的に答えられた」のであり、すでにこの時点で「農村ソヴェト」をめぐるコミンテルンの「迷い」は十分、払拭していたように見えたからである。

ウィットフォージェルによれば、コミンテルンや中国のコミュニストたちがむしろ心配していたのは、方々に散在した権力の中心がそれなりの期間持ちこたえることができるかどうかという問題であり、そのことは1928年10月、共産党の支配下にあった湖南と江西の境界地域で開かれた第二回地区党代表



会議のために起草された決議でも取り上げられた。ここでは、「現在、中国における革命の状態は、国内における買弁階級と田紳の内部ならびに国際的ブルジョアジー内部の、絶えざる分裂と闘争とともに発展を続けている」と結論づけられている。さらにこの決議は、このような状況下において、「小さな赤色地域は疑いなく永続するのみならず、それは絶えず発展を続けて、日毎に、全国的政治権力を獲得する目的に向かって近づくであろう」と指摘した<sup>14)</sup>。

この決議はまた、挫折の可能性を認めつつ、「もし革命状態が絶えず発展せずにある期間停滞するならば、小さな赤色地域を永く持ちこたえることができないであろう」と予測している<sup>15)</sup>。だが、毛沢東にとって、農村の基地の将来がどうなるうとも、中国の民主主義革命が、「プロレタリアートの指導権の下においてのみ達成される」ということだけは確実であった<sup>16)</sup>。もちろん、ここでの究極的な目的は、コミュニストの支配する農村地域をできるだけ多く作るのではなく、「全国的な政権を獲得する」ことである<sup>17)</sup>。とはいえ、ウィットフォーゲルが指摘しているように、「この1928年10月の決議は、その戦略的考え方がコミンテルンのそれと一致していることと、その起草者が朱徳とともに湖南、江西の省境に農村での権力の中心地を作り上げつつあった、毛沢東その人であった点で注目に値している」<sup>18)</sup>。このことは、農村での権力樹立の立場が、ここでもまた毛沢東独自のものであったわけではけっしてなく、むしろ第一義的にはコミンテルンのそれであったことを示唆している。

## 2. 毛沢東の虚像と実像

1924～27年という第一次統一戦線期におけるウィットフォーゲルの中国革命論をめぐる記述の中で、毛沢東の名前がほとんど出でこなかったのには、それなりの理由がある。なぜなら毛沢東は、第一次統一戦線期まで、民族革

命家としての著名人リストには入っていなかったからである。例えば、1927年の前半に、武漢の農民本部の一つを訪れ、また毛沢東が再三活躍した湖南省をも訪れたアンナ・ルイス・ストロングは、数人の革命的農民指導者の名前を挙げているが、その中に毛沢東の名前はない。陳独秀は、その回顧録である1929年の「書簡」の中で、第一次統一戦線で政治的に著名であった多くの коммуニストに言及しているが、その中にも毛沢東はでてこない。また、ロイが1930年に書いた中国革命に関する書籍の初版の中にも、毛沢東は共産党の人物のなかに載っていない。1946年に出版された同書の増訂のなかの、1927年7月中国共産党と国民党左派間の分裂以後の新事態を取扱った追加のところに、やっと毛沢東の名前が出てくるというありさまである。湯良礼はその著書『中国革命内面史』で、そもそも毛沢東に関心を払っていないし、またアイザックスはその著書『中国革命の悲劇』のなかで、毛沢東が中国共産党の第一回大会のときに出席していたことと、1927年の武漢同盟の崩壊後、同地を「逃げ出した」者の一人として彼に言及しているだけである<sup>19)</sup>。

ウィットフォークによれば、中国語や諸外国語で出版されている『毛沢東選集』の公定版は1951年以後、1921年から1927年のあいだに、「彼がどのようなことをしたか知らぬが、今日彼が記憶してほしいと思うことを、ほとんど書いたり述べたりしていないということを示している<sup>20)</sup>。そこで再録されているのは、「中国社会における階級の分析」（1926年3月）と、「湖南農民運動調査報告」（1927年3月）という二つの論文のみである。

スノーに口授した自叙伝のなかで毛沢東は、1926年の「中国社会における階級の分析」では、自分は大胆な反日和見主義的意見を述べたし、また1927年の「湖南報告」では、農民運動で新しい路線を採択すべきと主張したとしている。「正統派」の中国共産党史は、毛沢東の「正しい意見」は、陳独秀の「日和見主義」的な主流派によって抑圧され<sup>21)</sup>、また彼の「湖南報告」は、「日和見主義者たちによって抑圧され、その出版を禁止された」と

している<sup>22)</sup>。また、ベンジャミン・シュウォルトツによれば、毛の「湖南報告」は、「中国革命で農民が主流勢力になること」を暗に示している<sup>23)</sup>。それゆえにシュウォルトツは、「マルクス・レーニン主義の核心である重要な前提と、変遷する党の路線の一時的な表面上の要素とを区別して」、「毛の戦略はこのような重要な前提をめざす行動において異端者であることを示している」と結論づけた<sup>24)</sup>。シュウォルトツとともに『ドキュメント中国共産党史』を書いたブランド (C. Brandt) とフェアバンクは、1927年頃の毛沢東が、シュウォルトツのいう「毛沢東主義」の概念、すなわち、マルクス・レーニン主義とはちがって革命の前衛を「プロレタリアート」とは見なさず、「自分らが組織し、かつ指導する貧農」であるという考え方の基礎を作っていたと見ている<sup>25)</sup>。

だが、ここで問われるのは、毛沢東の「湖南報告」が、党史編纂者の主張するように「正統的」で抑制された「古典的」なものであったのか、それとも中国以外の一部の学者たちが主張しているように、「初期の異端な表明」であったのか、あるいはそれら以外のなにかであったのか、という点であろう。

ウィットフォーゲルの見るところ、毛沢東の「湖南報告」は、1927年2月18日にでき上り、その最初の部分は党の中央機関紙『嚮導週報』(3月12日)に発表され、第二の部分の要約と、その重要な点に解釈を加えたものが5月15日、アジアチカスの編集していた国民党中央執行委員会の機関誌『中国通信』(*Chinese Correspondence*)と国民党左派の英文機関誌に掲載された。もう一つの中国語の雑誌、『中央副刊』(*Chung-yang Fu-k'an*)は、発刊直後、同報告を載せた(3月28日)<sup>26)</sup>。ウィットフォーゲルは、こうした毛沢東の著作の編纂上の問題が、単に毛沢東と中国共産党の政治的立場を表明するだけでなく、いわゆる「毛沢東テーゼ」とコミンテルンとの密接な関係を示している点できわめて重要であるとして、以下のように指摘している。

「この『湖南報告』に発表された内容は、また『毛沢東テーゼ』の啓示にもなっている。もしこの報告が、マルクス・レーニン、及びコミンテルンの中心的戦略概念に違反しているものであるなら、コミンテルンの人間であるアジアチカスが、どうしてこれを中国で印刷するのみならず、ドイツでその訳本を共産党出版局から発刊するようなことをしたのであろう。『文献史』の著者たちは、毛沢東の報告が『中国通信』に掲載されたとは記しているが、これについてアジアチカスがどのような役割を果たしたかということは、なにも書いていない。さらに残念なことに、彼らはこの報告が、ソ連の刊行物『レボリュショニー・ヴォストーク』での掲載について記してはいるものの、それが毛沢東とコミンテルンとの関係から見てきわめて重大なこと、すなわちこの報告が、コミンテルンの執行委員会の機関誌である『コミュニスト・インターナショナル』の英語版（1927年6月15日）で出版されたことを見逃がしている」<sup>27)</sup>。

このように、ウィットフォーゲルによれば、レーニンやコミンテルンの重要な教義に違反した文献として、コミンテルンの編集者たちは、毛沢東の報告を寛大に扱っている。あるいは、そもそも毛沢東の存在そのものが、まだ当時の状況では取るに足らないものであったとのとらえ方もできる。たしかに、このような編纂上の矛盾を暴露したからといって、「毛沢東主義者」や共産党の主張する「正統性」を解明できるものではない。だが、少なくともそれは、毛沢東の若い時代の経歴と著作を研究することによって、そこに隠されている中国革命の評価に関わるきわめて重要な問題点を提起しているといえる。

### 3. 国民党との関係性における毛沢東

1927年から毛沢東は、コミュニストの支配するゲリラ部隊を自分で指揮したときには、若干の軍隊経験をもっていた。それゆえに彼は、革命戦争の問題について、レーニンやスターリンよりも、より直接の関心を抱いていた。1930年代から1940年代のはじめにかけての毛沢東の著作の多くは、この問題を扱っている。それゆえに、ウィットフォーゲルの見るところ、もし毛沢東が共産党の戦略に関して多少なりとも独創的な貢献をしているとすれば、それは「ゲリラ戦」の問題についてである。例えば、戦後まもなくの南アジアやアフリカにおけるいくつかの事件は、この種の軍事行動が、なお有力な武器となっていることを示している。また1960年代までには、毛の著作が広く頒布されているので、彼の軍事関連著作は、これまでも世界の多くの地域におけるコミュニストの局地戦を助けてきた。

「毛沢東はたとえ自由を破壊するための武器を自ら造り上げられなかったとしても、他者によって作られた武器を自分の世界に応用するうえで十分な資源を有していた。つまり彼は、レーニン・スターリン主義の戦略を、レーニンもスターリンも実地に経験したことのない新たな環境、すなわち『農村』の生活に応用したのである。毛沢東は、明らかにこのことに矛盾を感じることなく、農民の中に入っていった。彼が人に苦痛を与えるのに抵抗感がなかったことは、環境とは無関係なものに根ざしていたのかもしれないが、伝統的農村の上流集団が苦しむのを見たり、苦しませることを意に介さなかったことは、彼が心理的には、農村革命を指導するという仕事を慎重に準備していたことが伺える」<sup>28)</sup>。

とはいえ、毛沢東の根本的性質がどのようなものであったにせよ、それが

彼の個性として結晶した方向は、明らかに彼の社会的生き立ちによって形成されたものであった。また、共産党運動の指導者たらんとする彼の願いがいかなるものであったにせよ、彼は国民党との協力で、また国民党の内部において巧みに活動したことによって、共産党内において名をなすことができたのである。

ここで重要なのは、1922年から1923年の夏にかけて、共産党が国民党と合作する考え方に傾いていたという事実である。毛沢東の態度は、明らかにこの新しい政治的雰囲気には適合しつつあった。彼は1923年6月、第三回党大会に出席したが、国民党が民族革命の指導者となることを歓迎したこの大会で、新たに中央委員に選ばれていく。

さらに、毛沢東は間もなく、「革命的ブルジョアジー」と協力する意思を表明する。中国共産党の中央機関誌は1923年の7月、曹錕のクーデターが国民の各階層、すなわち、農民、軍人、学生、及び商人に及ぼす影響について扱った多くの論文を発表した。毛沢東は「クーデターと農民」という論文をメディアに投稿こそしなかったが<sup>29)</sup>、「北京クーデターと商人」という論文を書いた。

毛沢東はさらに、この第三回党大会の決議（及びコミンテルンの指令）に従って、中国の商人を潜在的革命階級の中に含めていった。しかも彼は、大胆にも、潜在的革命分子のなかで、商人を労働者、農民、学生、及び教師の前に置いた。毛沢東は商人たちに、国民党の働きを軽視しないよう警告するとともに、「人民を殺す最上の技術を持っている」米国を信頼しないようにと説得した。また彼は、「商人の組織が大きければ大きい程、その影響力は大きくなる。全国の人民を率いる彼らの力が強くなればなる程、革命の成功は早くなる」とする政治的見通しを示した<sup>30)</sup>。

革命における「商人の指導権」を認めた共産党は、孫文の党内での統一戦線工作という共産党の新しい仕事に、きわめてうってつけであった。国民党の指導者たちも、早速この事実を認めた。国民党第一回大会（1924年1月）

で毛沢東は、中央委員候補に選ばれ、その春には、上海にある中国共産党中央委員会と国民党の行政部にあって活躍した<sup>31)</sup>。だが、そうであるとするならば、その選出は1925年秋ということになる。『毛沢東選集』の公定版の註は、他の資料と同じく毛沢東が、1924年1月の第一回国民党会議で、中央委員候補になったと述べている。毛自身の記憶によると、彼は国民党左派の指導者である汪精衛や右派の指導者である胡漢民とともに、「共産党と国民党の諸方策を調整させる」ように努力したことになっている<sup>32)</sup>。

毛沢東は1925年の夏、湖南で農会 (peasant unions) を組織しはじめたが、それがだれの命令によるものであったかについては言及していない。しかし逮捕される危険が迫って、国民党政府のある広東に移り、ここで毛沢東は急速に頭角を現していった。彼は、国民党の刊行物『政治週報』の編集長になり (第1~3期)、農民のオルグを訓練し、国民党の農民運動講習所を指導した。また第二回国民党大会では、党の宣伝部の部長代理に任命された。同大会で、国民党の軍事情勢に関する報告は蒋介石が行ない、宣伝活動に関する報告は毛沢東が行っていた。だが、ウィットフォーゲルによれば、「毛沢東の自伝の中で、国民党の第二回大会以後における事件は、とくに歪曲されている」<sup>33)</sup>。この会議後、本人の説明によれば、「広東で国民党の仕事が続いているあいだ」に、毛沢東は『中国社会における階級の分析』を書いたのだという。毛沢東自身はこの論文を、「思い切った土地改革と農民の活発な組織を主張したもの」であると述懐しているが、事実彼は、陳独秀の「日和見主義的」政策と意見が合わなくなったのがこの時からだとしている<sup>34)</sup>。

だが、ウィットフォーゲルによれば、陳独秀と毛沢東との論戦は、この論文の公定版の序言で毛沢東が主張しているような、陳独秀や張国燾に反対するものではなくて、「国民党とロシアの同盟、及びコミュニストと左翼を民族革命に包含させることに反対しているブルジョア階級の右翼に反対するもの」であった<sup>35)</sup>。

毛沢東は1927年1月、湖南における農民運動を視察するために同省に派遣された。彼はその翌月、その評価を報告書にして提出したが、この報告は重要な意義をもつものであった。毛沢東はその自叙伝で、自分は中国共産党から湖南に派遣されたと述べているが、問題はそれが、党の正式な「使命」を帯びて派遣されたのか否か、ということである。それを示唆して、毛沢東は自分が「中国共産党中央委員会」を代表してこの報告を書いたと主張しているが、ここでもまた問われるのは、コミンテルンとの関係性であり、かつコミンテルンと密接に関連していた当時の政治社会状況である。

#### 4. 毛沢東の「湖南報告」とコミンテルンの農業政策

ウィットフォークルによれば、毛沢東の報告の本当の意味は、当時の中国共産党とコミンテルンの政策の背景に照らして見れば、すぐに明らかになってくる。中国共産党の指導者たちは1927年はじめ、新しいコミンテルンの指令にこたえて、農民や国民党に対して、さらに急進的な政策を模索しつつあった。しかし彼らは、土地の国有化は「最後」にすべきであるという1926年11月のスターリンの声明と、中国の青年は国民党の指導に従うべきであるという要請によって妨げられた。「毛沢東の報告は、こうした相対立する意志を調和させるために、あらゆる努力をしている。当時の毛は、のちに自ら主張していることとは反対に、自分の党に対してとくに発言したり、党の政策の特定問題を論じたりしていなかったのも、それだけこのことに熱を入れたのである。毛沢東は最初から、急速な農民運動の推進を『革命当局』に提起することに努力した。というのも、毛沢東はこの報告を、党の同志たちのほかに国民党の党員も読むのを期待したからであった」<sup>36)</sup>。

だが、この報告は、当時のコミュニストや国民党左派の発言に特有の、あまりはっきりしないやり方で、「革命グループ」や「進歩的」グループに呼びかけていた。そして、一方では国民党右派を激しく非難しながら、その右



派との「決裂」が望ましいことを表明せずに、コミンテルンの政策の線にとどまっていたのである。

たしかに毛沢東は、実質的な労農同盟崩壊後の状況下で、貧農こそが「農村」における革命主勢力であるとしていたものの、それは必ずしも農民による全国的革命の指導を意味したわけではない。農民は指導されなければならないとしても、ではいったいだれに指導されるのか。ウィットフォークルによれば、この報告の原版では、共産党の名は第一部ではまったく出てこず、第二部のなかでただ一カ所、言及されているのみである。ある農村での農民の聴衆を前にした演説で毛沢東は、「二つの階級と二つの党」から生まれた委員会で満ちた新たな革命社会の出現を想定した。すなわち彼は、「村と町には、農民協会、労働組合、国民党、共産党はみなそれぞれの委員会のメンバーを出す。実際、それは委員の世界である」との見解を表明したが<sup>37)</sup>、それは毛沢東の日頃からの信念について述べたものではなく、いわば27年以降の新たな政治状況に対する政治判断に委ねたものである。つまり、「組織された農民を組織された労働者のまえに挙げて、毛沢東は、1923年に商人を持ち上げたように、1927年には農民の聴衆を持ち上げたのである」<sup>38)</sup>。1923年の商人に対する論文を削除した『毛沢東選集』の公定版は、国民党を中国共産党の前にもってくるという二つの党の順序を変えずに、「湖南報告」のこの部分を再録しているものの、この公定版は、労働組合を農民協会 (peasant associations) の前においた。

毛沢東の立場が当時の政治状況に拘束されたものであるとすれば、ここでも問われるのはコミンテルンとの関係である。その意味でこの報告が、1950年代初頭の改訂版で他にも若干の修正が加えられている点もまた、注意する必要がある。なぜなら、コミンテルンは、何らの留保もなしに、「農民は中国革命のブルジョア民主主義段階における主勢力である」としていたからである<sup>39)</sup>。ウィットフォークルによれば、「毛沢東はその『湖南報告』で、貧農は『農村』における革命勢力の主力であると述べた。しかし、民主主義革

命一般について語ったときには、革命達成への農民の貢献度は七割で残りの三割は都市の住民と軍隊に帰すべきものである、としていた。したがって、公定版において、彼が七割と控え目にいったところが削られているのは、異とするに足らない」<sup>40)</sup>。このように、のちに毛沢東が支配の正当性を農民に求めていたとされる一般の評価とは、この段階では対コミンテルンとの関係性における状況判断に委ねられたものであったに過ぎない。それゆえにウィットフォーゲルは、次のように続ける。

「この報告のもう一つの特色は、さらに重要な問題を提起する。すでに指摘したように、この報告の原文は、中国共産党の役割を強調していなかった。この問題を避けて毛沢東は、なお国民党の指導権を認めながらも、当時のコミンテルンの指令について説明する際に、慎重な路線をとっていたが、そのことは次第に中国共産党の独立を主張することとなった。彼は、『湖南報告』の改訂にあたって、共産党が1927年2月当時、なお革命の主導権を争う闘争に踏み切れなかった統一戦線の事情を読者に説明することもできたであろう。しかしそうすることによって、毛沢東は陳独秀との態度が同じであったことを大寫しにすることになる。そこで毛沢東は、本文の政治的調子を変える方を選んだ。彼は、『共産党の指導』といった言葉を、原文にはそういう言葉も、そういう意味合いもなかった多くの個所に挿入していったのである」<sup>41)</sup>。

このように、『毛沢東選集』の編纂に際するかつての著作の改訂作業とは、何ら学術的な客観性を高める意味を持つものではなく、ただ単に自らの追求する政治的目的を達成するためのものである。つまり、党の方針が許すにしたがって、毛沢東は「農民の闘争」を自らの政治的、社会的「指導権」を得るために称揚したというわけである。彼は貧農が元の村の有力者たちに加えた残酷な行為を正当だと述べていたが、経済問題では土地問題についてのコ

ミンテルン指令を陳独秀が理解した以上に出るものではなかった。毛はきわめて重要なことから、取るに足らないことに至るまで、あらゆる種類の「改革」について検討し、勧告した。例えば彼は、穀類の投機の禁止や地代などの制限や、賃貸契約の破棄等を歓迎した。また利子の引き下げや法外な税金を廃止することに賛成し、果実酒の醸造や砂糖精製の統制や、豚・鶏・家鴨の飼育、役牛殺生の禁止、農村共同組合の推進、地方道路・堤防の構築などの諸問題について討議した。ところが、この報告の第一部では、毛沢東はまったく土地問題を提起していない。第二部において、はじめて彼は、「貧農の土地問題やその他の経済闘争もまた、直ちに着手すべきである」とするいたって簡単な文章で、この問題の存在を示唆しているにすぎない<sup>42)</sup>。つまり、役牛や鶏の問題について非常に饒舌であった毛は、土地問題がいかなる性質を有するかについては、なにも説明しなかったし、その可能な解決方法について何ら検討しなかったのである。それゆえに、ウィットフォーゲルは、これらの重要な問題における毛沢東の慎重な行動を考えれば、毛沢東についてロイが指摘した、「1927年の重要な時期に、彼は共産党の指導者の中で、最右翼を代表していた」という説明を理解できるという<sup>43)</sup>。

## 5. 毛沢東主義と「日和見主義」の展開

毛沢東は1926～27年という決定的に重要な時期に、自分と陳独秀との間には土地問題について天地間程の開きがあったという印象を与えようとした<sup>44)</sup>。だが、もしそれが事実であるとしたら、なぜ毛は1949年以後においても、その主張を裏書きするひとかけらの証拠さえ示さなかったのか。

ウィットフォーゲルによれば、「湖南報告」を仔細に検討すると、陳独秀と毛沢東の間にもどのような相違があったとしても、一致点の方が圧倒的に多かったことがよくわかる。事実、そうであったからこそ、1927年5月はじめの第五回党大会後、毛沢東が最大の民族革命農民組織である中華全国農民

協会（All China Peasant Federation）臨時執行委員会の組織部長に選ばれた理由が容易に理解できる。このような任命は、「当時の中国（共産）党の完全な独裁者であった」陳独秀の同意を必要とするものであった<sup>45)</sup>。

党の「正統的」歴史編纂者である胡喬木は、この重要な農民組織の指導者としての毛沢東の活動について何も言及していない。また、『ドキュメント 中国共産党史』の著者たちは、毛沢東が農民連合会の「日和見主義的」な指令に同意したのは、「党の規律を守る」ために、「恐らく自分の意志に反して」行ったことであろうと批判している。もちろん、それは事実だったかもしれないが、ウィットフォークルの見るところ、このことは1927年7月まで、毛沢東が陳独秀と同様に、モスクワが定めた「日和見主義的」農村政策の遂行に従事していたことを示している。例えば、同年八月七日の緊急会議の経緯はその理由を示すものである。新たなコミンテルン代表ロミナーゼが主宰し、中国共産党中央委員会がその農村政策において犯した最も重大な「日和見主義」の誤まちを追及したこの会議は、その批判を全中国農民連合会まで拡大した。この8月7日の攻撃は非常に多くの言葉を費しているが、その言葉使いからして、ロミナーゼや中国共産党の最高幹部瞿秋白の胸中では、明らかに中国共産党中央委員会と農民連合会の指導者たちは農民運動の弾圧者を弁護し、「革命にとって有害な」地方自治政府の形態を支持したことに対する「共同責任」を負うべきとする考えがあったことが伺える<sup>46)</sup>。それゆえにウィットフォークルは、当時の毛沢東をめぐる政治的状況について次のように分析している。

「このように8月の会議では、毛沢東ははなやかに武装した騎士ではなかった。事実彼は、陳独秀ほど明確ではないとはいえ格下げされた。その当時の彼の地位は、陳のように高くはなく、その責任も陳のように包括的ではなかった。陳が左遷されたあと、他の党の指導者たちが、いつその指導的地位を追われたかということについては、ある種の混乱が

ある。張国燾は、毛沢東も8月7日に左遷された中の一人だと述べている。李昂は、新たに党首席代理になった瞿秋白が、同日譚平山を追放し、『その後他の者を』攻撃したと述べている。ここで周恩来は痛烈に非難された一人であり、その『日和見主義的』態度は記録によく残っている。例えば、張国燾は、党指導部の再編の過程において周は、『ほとんど追放に近かった』としている<sup>47)</sup>。

ウィットフォーゲルによれば、それまで高く優遇されていながらも、のちには後悔している党幹部をどちらかといえば重要でない他の任務につかせるということは、共産主義運動では慣例のことである。なぜなら、「この方法によって党はなおその技能を利用することができるし、非難された同志は、自分の改善された政治的理解を示すことができる」からである<sup>48)</sup>。それゆえにウィットフォーゲルは、「8月7日の会議後、党が新たに地域的に制限された役割を毛沢東に与えたことは、恐らく瞿秋白にこのような考えがあったからであろう」と指摘する<sup>49)</sup>。とはいえ、ここでも背後にいたのはコミンテルンである。「モスクワの新しい指令に従って、中国共産党中央委員会は、収穫期の中国の各地で武装蜂起をはじめの命令を下した。湖南は、このような活動のために選ばれた四つの省の一つであり、毛沢東は蜂起を指導するために同省に派遣されたのであった。だが、この任務を遂行するにあたってとった方法により、毛沢東はその全政治的生涯のなかでも最も痛烈な批判を受けることになった」<sup>50)</sup>。なぜなら、コミンテルンは、都市重視の観点から、毛沢東の運動が失敗するであろうと考えていたからである。

瞿秋白が議長になって開かれた1927年11月14日の中国共産党拡大中央委員会は、秋収蜂起について嚴重な調査を行なった。その結果、湖南の事態について下された委員会の判定は、惨澹たるものであった。すなわち、11月14日に採択された党規に関する決議は、次のように述べている。「『湖南』地区における蜂起では、土地改革と政治権力確立の計画がまったく考慮され

ていない。このような計画の欠如は、農民をして、この蜂起を、コミュニストがいたずらに厄介な事態を引き起したと思わせる恐れがある。（中略）毛同志は、中央委員会の秋收蜂起の政策ゆえに派遣されたのである。彼は事実上湖南の省委員会の中心人物であった。湖南省委員会が犯した誤まちについて、彼は最も重大な責任を負わなければならない。したがって彼は、中央委員会の臨時政治局員候補の地位から解任されなければならない<sup>51)</sup>。

その後、間もなく書かれた著作で、当時中国共産党の党首であった瞿秋白は、1927年9月湖南委員会が犯した誤まちについて、さらに入念に書いている。毛沢東が指導の人物であった同委員会は、農民大衆を決起させるために現実に同志を送らなかつた。委員会は権力を奪取する時期を失した。委員会は土地没収の計画を作らなかつたし、また委員会は、革命的労働者と農民の軍隊を作ることに一方的に専念した。瞿秋白は、この「軍国主義的日和見主義」を「古い日和見主義から引き継いだ有害な伝統」であると決めつけた<sup>52)</sup>。こうしたことから、ウィットフォーゲルは次のように結論づける。

「1923年より1927年に至る毛沢東の行動を仔細に検討すると、彼が陳独秀のように『日和見主義的』であったことが明らかになる。このことは、毛及び党の歴史編纂者たちが、一貫して1927年11月の毛の左遷の真の理由をはじめ、ある種の困惑する事実を口にするのを避けてきたことによっても、間接的に確認される。では、毛沢東が第一次統一戦線の期間中、実際『日和見主義者』であったというわれわれの知識から、どんな結論が引き出せるのか。第一の結論として、毛沢東はけっして、党の伝説が仕立て上げようとするような超人ではなかつたということである。彼の『湖南報告』は、革命の残酷さを想定した戦略にははなばなしい寄与をしているが、土地問題の討論を避けているので、胡喬木が主張しているような、共産党の農民政策の『典型とすべき』青写真ではない。次の結論として毛沢東は、その心酔者が述べているような、老練な

異端者ではないということである。『毛沢東心酔』派の結論は——ついでにいておけば、彼らの結論は、『湖南報告』の第一部の3分の1にのみ立脚している——この報告自体と、また毛がその報告を完結した前後の彼の行動と鋭く矛盾している」<sup>53)</sup>。

このように、「湖南報告」はきわめて恣意的かつ政治的意味合いをもった文献であった。なぜなら、この報告が、毛沢東は独特の「非正統的」な革命家であることを示しているからではなく、彼が非情で「日和見主義的」な策動の術を身につけた人間であることを示しているからである。「天賦の才をもつコミュニストは、しばしば叫び立てる教条主義者よりも、はるかに危険な行動者である」<sup>54)</sup>。しかも、ここでも自己の政治的立場の強化に有利であるか否かを判断する基準とは、俗にいわれるような毛沢東自身の「カリスマ的」支配能力であったわけではなく、むしろコミンテルンだけが有していた権力と権威であった。

## 6. 中国共産党の発展とその主な特徴 (1927-1935年)

すでに明らかなように、1927年から35年に至る中国共産党の諸政策は、基本的には、コミンテルンとソ連の国内情勢によって定められた。1927年の終りの数カ月は、中国のコミュニストと国民党政府との間に内戦が始まった時期であり、この内乱は、農村の各地に権力の中心（ソヴェト）を作るようになった。この内乱は1934年まで、主として楊子江以南の地で行なわれていたが、日本が1931年秋、中国の東北地方に侵入してきたことによって、事態は複雑になっていった。

仮借なく強行されたソ連の農業集団化は、1929年3月以降、大部分の兵士が農村出身者であるだけに、軍隊の士気を大きく低下させた。そこでモスクワは、ソ連をゆさぶっている危機から注意を外らすために、外国が不安な

状態にあることを望んだ。ウィットフォーゲルの見るところ、1929年10月米国に端を発して、間もなく主要工業国全体に波及した世界恐慌を、ロシアの指導者たちが歓迎したことは容易に首肯できる。なぜなら彼らは、共産党の指導している革命が、その「第三期」に入りつつあると宣言しつつ、資本主義国の危機の進展につれて、労働者たちによる革命の遂行を期待したからである。そして彼らは実際に、このような行動を起こさせるために、可能な限りの努力をしていた。「モスクワの『第三期』政策と『李立三』路線との間に関係があることは、単純かつ明瞭であった。中国共産党に対する、モスクワのもう一つの国際政策の影響は、それほど目立ったものではなかったが、同じく運命を左右するものであった。それはモスクワの対独政策と、日本との諒解に達しようとの企てであった」<sup>56)</sup>。

毛沢東はスノーに、「1927年11月、最初のソヴェトが湖南省境の茶陵『井崗山』に設立され、はじめてソヴェト政府が作られた」と語っている<sup>56)</sup>。だが、ウィットフォーゲルによれば、他の場合と同様に、毛沢東のこの記憶は正確というよりは、むしろ自分本位に誇張されたものである。というのも、「1927年8月、陝西にできた共産党の支配するソヴェト——これは事実上記録にとどめられていない——を除いては、中国の中心部にできたソヴェト政府としては、1927年秋、広東省の海豊郡と陵豊郡にできたのが、最初であったという点で、一般の意見は一致している」からである<sup>57)</sup>。

一方、コミンテルンの議長ブハーリンは1927年12月、このソヴェトの設立を称賛し、その農民の性格を上機嫌で次のように認めた。「われわれは広く各省に発酵物を持っているが、広東省の一部では、権力がすでに農民ソヴェトの手に移った。中国の農民運動史上はじめて、ソヴェトの権力が農村を基盤にして作られたのである」<sup>57)</sup>。コミンテルンの第九回中央委員会総会（1928年2月）で、ソ連共産党と中国共産党を代表してブハーリン、スターリン、向忠発、及び李立三によって採択された「中国問題に関する決議」は、同様の感想を表明している。この決議は、多くの地域において展開されてい



る農民運動、すなわち、広東省の各地におけるソヴェト化と同省における革命運動の拡大、湖南、江西、湖北、河南、山東、満州、及び東北各省一般における革命運動の増大をきわめて重要なできごとであるとして称賛した<sup>58)</sup>。また毛沢東は、1928年10月の決議で、彼が重要な役割を演じた湖南、江西省境のソヴェトをはじめいくつかの他のソヴェトの前に、「海豊と陸豊の農民の独立政権」を挙げている<sup>59)</sup>。この項までには、『毛沢東選集』の編纂者は、海豊、陸豊政権ができたのが、1927年の4月、9月、及び10月の蜂起の結果であり、この政権が1928年4月まで存続したという脚注をつけている<sup>60)</sup>。

毛沢東が1928年11月に書いて、中国共産党中央委員会に提出した報告によると、コミュニストの一団は1927年10月、党の組織をまったくもたず、ただ現地兵の二個部隊と120挺の粗末なライフルだけをもって、湖南と江西の省境に旗を挙げた。1928年の2月までに、はじめて党の各委員会が設立され、同政権は、間もなく井冈山を含む四つの県を支配するようになった。この政権は、「労働者、農民及び兵士の政府」と名づけられた。毛沢東と朱徳は3月末、湖南南部の党特別委員会の要請によって、湖南南部で敵と戦ったものの、失敗した。毛と朱が、湖南南部出身の農民軍の支持によって、「湖南・江西の省境地域に独自の政権」を樹立できたのは、この敗北の後であった<sup>61)</sup>。

このとき朱、毛政府は、まだ「ソヴェト」や「評議会」(council) というような名称は用いていなかったが、同政権の指導者たちは1928年11月、それまでの「誤まち」を正すために、党の中央部の構想をもとにして、各層の評議会の詳細な組織法を起草中であった。毛沢東は、単に「兵士の委員会」だけで、「兵士代表者会議」をもたなかったのは誤まりであると指摘した<sup>62)</sup>。

ウィットフォールゲルによれば、こうした湖南・江西をめぐる毛沢東の11月報告は、明らかに湖南・江西ソヴェト政権の形成過程で、現地の指導者たちが独自の政策を実行していなかったことを示している。この文献によると、

中国共産党中央委員会は、「すべての層」の評議会にいちいち指図を与えていただけでなく、毛・朱政権に15パーセントの税金をとることをも命令した。従来20パーセントの税金をとっていた湖南・江西政権は、自由裁量の必要性を唱えたが、結局この低率の税金を承諾した。

若干の例では、この地方政権は、上海の党本部からの命令に対して反対意見を述べていた。例えば、湖南・江西の基地が小ブルジョアに魅力ある綱領を展開するよう求めた党の要求によれば、党本部は「労働者の利益と土地革命と民族解放」に正しく注意を向けよとの批判を提起した<sup>63)</sup>。また基地の軍隊はそのゲリラ戦を「数千里四方」にわたって拡大せよとの中央委員会の要求は批判された<sup>64)</sup>。毛沢東は、東方や南方に進出せよとの命令はまったく間違っただと考えたが、朱・毛部隊は、このような行動をすれば「間違はなく敗れる」と知りながらも、それが党の要求だからという理由で、南方への進出を行なったのである。毛沢東がのちに述べているように、二人は「全紅軍を率いて」進撃したが、実際は惨澹たる結果に終わった<sup>65)</sup>。こうしたことからウィットフォーゲルは、毛沢東と党組織との従属関係を次のように説明する。

「このように、朱・毛政権は、中央委員会から命令を受けていたほかに、湖南の党委員会からも指令を受けていた。朱・毛政権はまた、明らかに党の上層部と省境政府の中継ベルトの役割をしていた湖南省南部特別委員会にも従属していた。この特別委員会の代表が『現地』にやってきて、省境政権が『家を焼いたり、人を殺したりすることに不徹底である』とか、『小ブルジョアをプロレタリアにする』ことに成功していないなどと批判しつつ、『前敵委員会の指導者たちは更迭されたし、われわれの政策は変更された』。特別委員会が『すべての工場を労働者へ』というスローガンを推進するように主張すると、朱・毛政権は、小ブルジョアジーに対するこうした攻撃が、『彼らを豪紳の側に追いやる』こ

とがわかっているにもかかわらず、やはりそれに従った。また、湖南省委員会が、紅軍兵士の生活条件を一般労働者や農民のそれよりもよくするように要求したときも、毛沢東はそのための努力はすでになされているとして、この意見の受入れを明らかにしていた<sup>66)</sup>。

このように、毛沢東独自の権力が構築されたという中国共産党による「正統」史観としての評価とは裏腹に、毛沢東は究極的にはコミンテルンに従属しているさまざまな党組織に従いながら、自らの権力基盤を確立しようと努めていたに過ぎない。それゆえにウィットフォーゲルは、「たとえ毛沢東自身が中国に関するコミンテルンの決議の受諾を強調しなくても、1928年11月の彼の詳細な報告は、その政権の発展過程において湖南・江西ソヴェットの指導者たちが、あらゆる重要な事柄について、中央委員会とコミンテルンの命令を実行していたことを明らかに示すものである」と強調している<sup>67)</sup>。

## 7. 農村根拠地と毛沢東の革命戦略

毛沢東が指導していた湖南の党委員会は1927年9月、新しい中国革命の台頭は、ロシアの十月革命がもたらしたのと同様の結果を招来すると主張した。彼は1928年10月、中国の「ブルジョア民主主義」革命が、「プロレタリアートの指導の下においてのみ完成される」と訴え、「小さな赤の地域が究極的には全国的な政治権力を獲得する」との希望を表明した<sup>68)</sup>。彼は1928年11月には、「労働者の利益と土地革命と民族解放」を忘れないようにと、中央委員会に勧告した<sup>69)</sup>。そのうえ、毛沢東の著作からは、朱と毛の省境政権が農民の利益とイデオロギーに重点をおくべきだと、当時の毛沢東が考えていたことを示唆するものは何も見つからない。ウィットフォーゲルの分析は、むしろそれとは反対に、毛沢東が共産党運動の基本的な全国的、都会的、及び「プロレタリア的」方向をけっして捨てなかったことを示している。

農村の根拠地にいる間の毛沢東は、「農村地域における独立かつ隔離したソヴェト運動の発展」（シュウォルツ）を考えていたという推測とは逆に、共産主義運動が全国的規模で推進されるという近い将来の日々に思いを馳せていた。「われわれは非常に孤独感を味い、一刻たりともこの孤独な生活から脱け出したいと思わぬ時はない。革命を全国的に沸騰させ、盛り上げていくためには、都市の小ブルジョアをも含む、民主主義のための政治的、経済的闘争を開始することが必要である」<sup>70)</sup>。このように、たしかに毛沢東は都市のブルジョアの果たすべき役割を放棄したわけではない。だが、ここでのポイントとは、労農同盟崩壊後の毛沢東の戦略が、すでに都市の労働者とブルジョア（市民）を中心とした「労農同盟」としてではなく、農民を中心として、むしろ実質的には、労働者を代表とする都市の「ブルジョア（市民）」を従属的な立場に置く「農労同盟」としてその基本的性格を変化させていたことである。これは明らかに実質的な「ブルジョア民主主義革命」の否定であり、ブルジョア（市民）が依拠すべき「近代的」価値そのものの否定すらあった。

しかしながら、省境の共産党は、当然のことながら「農民と小ブルジョア出身の分子」に大きく頼らなければならなかった。だが、それだけに「非プロレタリア的な考え」と闘うことが肝要であると、毛沢東は1929年12月に論じている。彼は、極端な民主化と規律の緩和を図ろうとする小ブルジョアに、「プロレタリアートの闘争状態と基本的に両立しない」として反対しており<sup>71)</sup>、じつは「小ブルジョア」に対する評価とは、その言葉とは裏腹にきわめて否定的であった。

ウィットフォーゲルによれば、1929年12月に至ると、毛沢東は拡大されつつある省境政府の指導者として、まったく安定した地位を獲得しつつあった。しかし、毛沢東主義者の「伝説」とは逆に、彼はこの増大する力を用いてこの同地域における自分の地位を固めようとはしなかった。毛沢東は1929年2月の中央委員会の書簡を批判しているが、彼の意見によると、そ

れは新たな革命の進展に関してあまりにも悲観しすぎたものであり<sup>72)</sup>、中国内外で解決できない矛盾の数々を挙げていた。だが毛沢東は、「小さな火が広野を焼きつくす」という中国の諺を引いて、「中国においては西ヨーロッパにおけるよりも、革命はより急速に盛り上がるであろう」と予測したのである<sup>73)</sup>。

毛沢東は、当時たまたま彼が書記であった前敵委員会が、党中央委員会に出した書簡（1929年4月5日）のなかで、自分の意見が十分に反映されていることを知った。彼は1930年1月、9カ月前の書簡が主張した内容をここで繰り返し述べている。すなわち、「労農同盟」が都市のプロレタリアを中心にして進めるべきなのか、それとも農村における農民の闘争に求めるべきかをめぐって、次のように主張した。

「プロレタリアの指導は、革命を勝利に導く唯一の鍵である。党の基礎をプロレタリアに置くことと、主要都市の工業企業内に党の細胞を作ることは、現在党の組織面における重要な仕事である。それと同時に、農村地域における闘争の発展、小さな地域における赤色政権の確立、及び紅軍の拡大も、都市における闘争を助け、革命の盛り上がりを促進するために、とくに重要な条件である。したがって、都市における闘争を放棄することは間違いであり、またわれわれの意見によれば、農民の力が労働者の力よりも強くなり、そのため革命を害するようになりはしないかと、党員が農民の力の強くなるのを恐れることも間違いである。なぜなら、半植民地的な中国での革命は、農民の闘争から、労働者の指導権を取り上げた場合のみ失敗するのであって、農民がその闘争によって、労働者よりも強くなったことによって、失敗するようなことはないからである」<sup>74)</sup>。

これは表向きには、「労農同盟」が都市のプロレタリアに基礎を置くのと

同じくらい、農民の闘争に中国革命の展望を託している発言のようにも見える。だが、ウィットフォーゲルにとって、これは実質的には、「労農同盟」の「指導権」を農民に与えることによって、「半植民地」中国における革命を「アジア的」＝「前近代的」遺制の克服のないままに展望することを意味していた。このように毛沢東は、本来の労農同盟の理念とはまったく逆に、やがて労働者の「指導権」の農民への委譲によって、農民を中心とする「プロレタリアの指導」を正当化したのである。実際、毛沢東は同年12月、この判断が楽観過ぎたことを認めながらも、「中国の革命は近いうちに大きな盛り上がりを見せるであろう」と予期していた<sup>75)</sup>。

しかも、この革命戦略の大転換が起きた時期が重要である。なぜなら、ウィットフォーゲルの見るところ、それはコミンテルンが新しい革命の高まりが来ることを予測する数カ月前に、毛沢東派が全省を奪取する程の攻撃的行動を、三省においてとるように勧告していたことを示しているからである。また毛沢東は、党中央委員会がコミンテルンの1929年10月の指令を受諾して、新たな革命の高揚の構想を明らかにしたその同じ月の1930年1月、自分の提案を繰り返して述べている。「このような実情であったから、最少限度のいい方をして、彼が1936年に、李立三の蜂起と過激行動を伴ったセンセーショナルな大都市攻撃政策を非難したことは、毛沢東の偽善であった」<sup>76)</sup>。

李立三の指令によって、毛沢東と朱徳は長沙に共産党政権を作る企図に参加したものの、1929年の毛沢東の目的も、1930年の李立三の目的も達成されることはなかった。こうした相次ぐ惨澹たる敗北に、モスクワは方針変更の必要性を痛感するに至る。中国共産党が1929年11月16日、コミンテルンより受取った書簡は、都市における権力の中心が欠如しているにもかかわらず、ソ連の党指導部が、中国共産党による農村ソヴェトの設立を認める準備があるとしていた。その結果として、1930年5月には、李立三主義者の好みにすぎなかったあらゆる農村の基地を強化するという運動が、いまや農村地域における無条件の権力闘争となったのである。かくして、コミンテル

ンの指導者たちは、農村革命にまで成長したソヴェトと紅軍を、中国革命の二つのすぐれた成果であるとして賞賛していった。

事実、ソ連の指導部は、農村ソヴェトが労働者、農民、及び兵士によるソヴェトであると述べていた。しかし、農村基地の拡大に触れる際には、コミンテルンの指導者たちはきわめて慎重で、「中国のソヴェト運動をさらに拡大することは、現ソヴェトと紅軍の地域的基盤の拡大と強化に結びついた問題」であるとしていた。つまり、このソヴェトの拡大に大都市を包含すべきかどうかについては示唆を与えておらず、この段階ではコミンテルンの「迷い」がまだ払拭されていなかったことが理解できる<sup>77)</sup>。

だが、コミンテルンは基本的には、この段階の中国革命の任務が、主として「反帝国主義及び土地革命」にあると見ていた。この規定は、1931年9月20日の中華ソヴェト共和国 (Central Chinese Soviet Republic) の厳粛な宣言と法規において採用されている。例えば同年、中国共産党の指導者王明は、モスクワの労働組合の指導者たちの前で演説したが、彼の本来の立場なら、中国革命の都市的、工業的目標を強調することができたはずである。しかし王明は、そうはせずに、「新たな方針に従って、土地革命は進展し、ソヴェト地区が拡大され、紅軍は成功裏に国民党軍の攻撃を撃退しつつある」とコミンテルンの意向に即した形で「分析」している<sup>78)</sup>。

ウィットフォーゲルによれば、このように中国ソヴェトの指導者たちは、土地革命の支持者の大部分が農民であることを率直に認めていた。また、農村ソヴェト政府においてはもちろん、地方の党組織においても、農民が圧倒的に多いことを認めていた。だとするならば、いったいなぜ彼らは、農村ソヴェトが労働者に指導されていると主張したのか。それは明らかに彼らが、純粋に理論的理由だけでそのことを強調したわけではなかったからである。「他の場合と同様にこの場合も、共産党の教義は、はっきりとした行動的、及び指導的意味をもっていたのである」<sup>79)</sup>。

そもそも、マルクス・レーニン主義者の見解によれば、工業労働者は、自

分たちの経済的、政治的利益のために組織をつくって闘うという、他にはみられない独自の行動・習性をもっている。たしかに彼らは、社会主義社会を実現するために究極的に「大衆組織」の武器を利用することになる。だが、各自が孤立した小生産者で、地方に広く散在している農民たちは、このような組織力を欠いているし、またたとえ革命勢力の一部となったとしても、「社会主義への意欲」を欠いており、だからこそ本来、彼らは労働者階級に依存せねばならないと見なされたのである。ここでは本来、マルクス・レーニン主義の党に指導された労働者階級のみが、農民に完全な組織力を与え、「ブルジョア民主主義」革命にひそむ「初期社会主義」を発展させることができるはずであった。だが、中国革命史の現実には、その理論的前提の真逆を突き進んでいくこととなる。

ウィットフォーゲルによれば、中国共産党は、その発足時には都市の労働者を中心とするソ連共産党と結びついており、その利益が中国の労働者と共通であると主張し、自らを「プロレタリアの組織」と考えていた。朱・毛政権のような「農村ソヴェト」は、この中国共産党の一部をなすものであり、「工業都市労働者」といってもその数は微々たるものなので、都市や工業中心地帯からの物理的隔離を補うために、彼らは工業都市の労働者や小都市からの工業労働者、さらに村落からの農業労働者等を活動分子として包含していたのである。ソ連において行なわれていた社会的不平等の例にならって、中国のソヴェトは、そのプロレタリアート支持者に対して、一般農民に与えているよりも三倍の投票権や对人的地位を与えていたという<sup>80)</sup>。

毛沢東はたしかに表面的には1928年10月、1929年11月、及び1930年1月、「労働者は農民を指導しなければならない」と繰り返し述べていた。さらに、1931年に採択された中国ソヴェト共和国憲法は、その新たな政権を、「プロレタリアートと農民の民主的独裁制」と規定している<sup>81)</sup>。

李立三が時の権力者になる以前から、農村ソヴェトが「一時的性質」のものであると強調していた毛沢東やその仲間たちは、李の没落後もそうした主



張を続けた。1931年の憲法では、新たに確立された労働者と農民の民主主義独裁は、究極的には「中国全域に」勝利を収め、漸次プロレタリアート独裁とプロレタリア社会主義に発展するとされていた。この「正統派」マルクス・レーニン主義の立場に従って、毛沢東は引き続き、「プロレタリアートの指導権を強化する」必要性について論じていた<sup>82)</sup>。

1934年1月、中華ソヴェト第二回全国大会（中ソ二全大会）に送った長文の報告書のなかで、毛沢東は再び、こうした中国革命論についての考えをまとめ上げた。すなわち、「われわれの経済政策を支配する原則は、（中略）将来社会主義に発展する前提条件を作るために、農民に対するプロレタリアートの支配権を確立することにある」と訴えたのである<sup>83)</sup>。さらに彼は、「プロレタリア独裁を実現する」準備段階として、「労働者、農民の民主主義独裁を打ち立てる」と述べていた<sup>84)</sup>。

## 8. 蒋介石に対する評価の変化と毛沢東の立場

この頃、中国共産党は、蒋介石とその国民党政府に対する深刻な憎しみを吐露していた。蒋介石は1930～31年の冬以降、江西、福建省境にある中央ソヴェト政府の壊滅に努めていた。瑞金をその首都とし、毛沢東を主席とする「中央ソヴェト政府」は、17の県にまたがり、総人口300万を有していた。他のソヴェトは、いずれも小さくかつ安定していなかった。1932年における全ソヴェト地域の兵力は合計15万1,000余りで、その有するライフルを、ウィットフォーゲルは9万7,500挺であったと推定している。「江西・福建地区の紅軍は1934年のはじめには、その数18万で、他に約20万の遊撃隊と赤衛隊（Red Guards）がいた。国民党政府は、中央ソヴェトに対してたびたび『殲滅』戦を試みた。その第一回は1930年12月から1931年1月まで、第二回は1931年5月、第三回は1931年6月であったが、いずれも失敗に終わった。日本の侵略に応じて、蒋介石はその軍隊の一部を脅威をうけ

ている地域に派遣した。コミunistたちはこの機会を利用し、『裏切り者』の国民党政府の犠牲において、自分たちの勢力を拡張したのである』<sup>85)</sup>。

これに激怒した南京の指導者たちは、再びコミunistに対する攻撃を開始し、各ソヴェトに対する軍事活動を強化するとともに、都市における政治行動を激化していく。実際、都市におけるコミunistに対する迫害があまりにも苛酷であったので、1932年8月から9月にかけて、中国共産党中央委員会はその本部を上海から瑞金に移さねばならなかった。その頃、毛沢東はまだ党の主席ではなかったが、いまや事実上、全中国のコミunist中、最も有力な存在となっていた。

1933年4月に行なわれた第四回目の作戦行動（Campaign）は、山岳地帯や農村地帯においては、ゲリラ部隊が数においても装備においてもはるかに優勢な軍隊に対抗して、その地歩を守るという結果に終わった。ドイツ人の軍事顧問の援助があつたにもかかわらず、蒋介石はその目的を達成することができなかったのである。だが、この第四回目の作戦はまた、広く散開された小さな砦やトーチカや、組織的経済封鎖に対して何をすればよいかを示していた。

1933年4月にはじまった第五回目の作戦行動によって、国民党軍はコミunistの中核地帯を取巻く鉄環（tight circle）を敷くことができた。1934年、中央ソヴェトの指導者たちは、自分たちの立場が維持できないことを悟りつつあつた。張国燾によれば、新疆か外モンゴルを経由してきたモスクワの無線電報の指令は、その拠点を放棄して、できるだけ遠い中国の辺境、必要なら外モンゴルあたりにまで逃避せよと共産党に伝えてきた。コミunistたちは1934年の秋、西北に向つて、いわゆる「長征」に乗り出す。紅軍が中央ソヴェトの地域を放棄したとき、毛沢東は、自分を最も強く批判していた党の指導者である瞿秋白を同行しなかった。瞿秋白は間もなく国民党側に捕えられて、予想された通りに処刑された。毛沢東によると、この期間中に、「紅軍は30万から僅か2,3万に減り、中国共産党員も30万から2,3万

に滅り、国民党の支配する地域にある党の組織は、ほとんど完全に壊滅していった」<sup>86)</sup>。

共産党の主力部隊は1935年1月、緊急の政治問題を討議するために貴州省の遵義で停止した。この時までには、毛沢東は、張国燾に代って党の最高指導者になっていた。張は第四方面軍を率いて四川西部におり、この会議には出席しなかった。紅軍の残存部隊は、貴州から最初南方に向い、ついで西方に転じ、最後に北方に向かって行進し、6月の前半には再び、四川省西部の毛児蓋に長く逗留した。ここで彼らは、張国燾の提案に基づいて、楊子江上流地域にとどまるべきかどうかについて討議したのである。毛沢東の計画が優勢を占め、張国燾は毛児蓋ではっきりと第二の地位に下った。

たしかに、彼らがその最終的な目的地を決定したことは、当面きわめて重要なことである。だが、中国の共産主義運動全体からいってより重要なことは、その当時中国本土に進出してきた日本に対する彼らの態度であった。日本軍は5月28日、驚くべき速度で内モンゴルを支配し、6月7日には、北京、天津を含む中国東北部に、その管轄権を拡大していった。何応欽は6月9日、南京政府の同地域の代表として、日本の圧力に屈し、国民党軍を河北省から撤退することに同意した。

ウィットフォーゲルによれば、この日本の新たな動き、とくに内モンゴルの占領は、中国のみならずソ連にとって大きな脅威となった。当然、中国のコミunistたちが、その反帝国主義的宣伝を日本に対して集中するものと思われた。だが、モスクワの指導者たちは1935年6月、まだ日本に対してどれが最上の手段であるかについて決心がついていなかったし、また統一戦線政策を国民党政府にまで拡大するという考えも熟していなかったのである。実際に、コミンテルンの機関紙「インプレコール」は、なおも蒋介石を「中国を売り渡す者」と攻撃していた<sup>87)</sup>。この事実は毛沢東やその同志たちが「中国人民大衆」に対するアピールで示した方針を説明している。なぜなら、1935年6月15日付のこの文書で、中国共産党の指導者たちは、日本

による中国東北地方への侵略に対しては口を極めて攻撃し、それでいて他のすべての帝国主義国については何も触れず、その他の点についてはこれまでの方針とまったく変わっていなかったからである。「下から人民統一戦線を作るという方針は、依然として、そのままであった。この統一戦線には、日本帝国主義、及びテロ集団藍衣社を抱えている日本との共犯者、蒋介石と戦う気のある革命大衆、及びすべての武装兵力を包含するというものであった。このように、蒋介石と手を切る用意のある兵士のみが加入する資格を与えられ、また蒋介石自身は、中国の коммуニストたちの考えでは、抹殺の手段をもってのみ処置すべき、日本の味方であると断定された」。例えば、『インブレコール』でも、「中国ソヴェト政府は蒋介石に死刑を宣告する。中国ソヴェト政府は、全国の人民に日本帝国主義の番犬を撲殺することを要求する。中国4億の人民は、帝国主義の従僕を逮捕し、即座にこれを銃殺する完全な権利を有する」といった極端なまでの反蒋介石の立場が表明されていたのである<sup>88)</sup>。

この注目すべき声明は、モスクワで開かれたコミンテルンの第七回世界大会中、王明による抗日戦争の実現のために、さまざまな政治的、軍事的勢力を結集すべく新しい型の統一戦線の結成が主張される約7週間前に発表された。現実には中国人民を結束させるために、王はその際、「すべての党」や「すべての有名な政治家や社会人」はもとより、誠実な国民党の若手黨員や藍衣社の人々までも一諸にすることのできるような、「人民の防衛政府」を作ることを提案したのであった<sup>89)</sup>。つまり、国際共産党のこの最高会議場において、王明は中国共産党の政策の急転換を要求していたことになるが、問題はそれがいったいなぜなのか、ということである。

#### 《註》

- 1) 拙稿「K. A. ウィットフォーゲルの中国革命論——「アジア的復古」と労農同盟の崩壊をめぐる」、『明治大学教養論集』通巻458号、2010年9月。
- 2) Joseph Stalin, *Works*, Vol. 9, p. 366, New York, 1953 cited in Karl August

- Wittfogel, "A Short History of Chinese Communism," in *General Handbook on China, 2 vols.*, edited by Hellmut Wilhelm, Human Relations Area Files, Inc. (New Heaven: 1956), p. 1159.
- 3) *Ibid.*
  - 4) Joseph Stalin, *Works*, Vol. 10, p. 162, New York, 1953 cited in *ibid.*
  - 5) *Ibid.*
  - 6) Li Ang, *Hung-se wu-t'ai (The Red Stage)*, Chungking, 1928 cited in *ibid.*, p. 1161.
  - 7) *Ibid.*
  - 8) *Ibid.*
  - 9) *Ibid.*, pp. 1161-1162.
  - 10) M. N. Roy, *Revolution and Counter-Revolution in China*, Calcutta, 1946, p. 621, cited in *ibid.*, p. 1161.
  - 11) M. N. Roy, *op. cit.*, p. 622, cited in *ibid.*
  - 12) もちろん、当時の中国の都市や労働者が近代市民社会を構成する要件を十分満たしていたわけではないことはいうまでもない。だが、ウィットフォーゲルは恐らく、マルクスの労農同盟論に基づきつつ、労働者とブルジョア（市民）が体現している「近代」の原理によって「前近代」の原理を牽引するという論理構成が維持されるべきであると考えていたであろう。
  - 13) Karl August Wittfogel, *op. cit.*, p. 1162.
  - 14) Mao Tse-tung, *Selected Works*, Vol. 1, New York, 1954, p. 66 cited in *ibid.*  
毛沢東「中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか」（1928年10月5日）、毛沢東選集刊行会訳『毛沢東選集』（三一書房、1956年）第一巻所収、89頁。
  - 15) *Ibid.* 同。
  - 16) Mao Tse-tung, *op. cit.*, p. 64 cited in *ibid.*, p. 1163. 同 86 頁。
  - 17) Mao Tse-tung, *ibid.*, p. 70 cited in *ibid.* 同 94 頁。
  - 18) Karl August Wittfogel, *ibid.*
  - 19) *Ibid.*
  - 20) 中西功も、毛沢東によって西安事変や抗日民族統一戦線についての評価が変更されるという傾向が、『毛沢東選集』の編纂時（1951年～）に行われた系統的改訂に遡ると指摘している（『中国革命と毛沢東思想』、青木書店、1969年、34頁）。ここで行われている最大の変更とは、1949年の時点では「新民主主義」であったはずなのにもかかわらず、中華人民共和国の成立による「新民主主義」の「成功」により、社会主義段階に入ったとすり替えられたことである。これについては、田中仁『1930年代中国政治史研究』（勁草書房、2002年）、5-6頁、及び今堀誠二『毛沢東研究序説』（勁草書房、1966年）41-42、225、281-282頁を参照。ただし今堀自身は、この毛沢東選集での「改ざん」の事実をめぐり、「新選集が、

民族ブルジョアジーの革命性を正しく評価して統一戦線にまき込み、平和革命の路線を引くと同時に、ブルジョアを主体として社会主義革命を起すことの『幻想』をうちく抜き、平和革命における反右派闘争に布石を打ったわけである。新選集本は階級区分について、正確な分析を示したといえる」（同 75-76 頁）と「改ざん」そのものを擁護し、いわばウィットフォーゲルの立場とはまったく正反対の結論を引き出している。

- 21) Hu Chiao-mu, *Thirty Years of the Communist Party of China*, Vol. I, 1951, People's China, p. 30 cited in Karl August Wittfogel, *op. cit.*, p. 1163. 胡喬木、尾崎庄太郎訳『中国共産党の三〇年』（大月書店、1953年）、18-21頁。
- 22) P'ei T'ung. "A Brief Review of the First Five Congresses of the Chinese Communist Party (1921-1927)," 1952, quoted in *Current Background* (U.S. Consulate General, Hongkong), No. 215 from *Hs Ueh-hsi* of September 1, 1952 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1164.
- 23) Benjamin I. Schwartz, *Chinese Communism and the Rise of Mao*, Cambridge, 1951. p. 199 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.* B. I. シュウォルトツ、石川忠雄・小田英郎訳『中国共産党史』（慶応通信、1964年）、217頁。
- 24) *Ibid.*
- 25) Conrad Brandt, Benjamin Schwartz and John K. Fairbank, *A Documentary History of Chinese Communism*, Cambridge, 1952, p. 79 cited in *ibid.*
- 26) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 27) *Ibid.*, pp. 1164-1165.
- 28) *Ibid.*, pp. 1168-1169.
- 29) ウィットフォーゲルによれば、この「クーデターと農民」という論文は、モスクワで開かれた第四回コミンテルン世界大会（1922年11月）に出席した劉仁静によって書かれたものである。*Ibid.*, p. 1169.
- 30) Mao Tse-tung, "Pei-ching cheng-pien yü Shang-jen" (The Peking Coup d'état and the Merchants), *Hsiang-tao Chou-pao*, nos. 31/32, July 1923, p. 233 cited in Karl August Wittfogel, *Ibid.*
- 31) Edgar Snow, *Red Star Over China*, 1938, New York, p. 143 cited in *ibid.*, p. 1170. エドガー・スノー、松岡洋子訳『中国の赤い星』（筑摩書房、1972年）、109頁。
- 32) Edgar Snow, *ibid.*, p. 142 cited in *ibid.*, p. 1170. 同。
- 33) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 34) *Ibid.*
- 35) *Ibid.*, p. 1171.
- 36) *Ibid.*, pp. 1171-1172.
- 37) Mao Tse-tung, *Hu-nan nung-min yun-tung k'ao-ch'a* (Report of an

*Investigation into the Peasant Movement in Hunan*), Tung-pei Pub. House, place unknown, 1949, p.28 cited in *ibid.*, p.1172. ちなみに、この部分の記述は、邦訳の「湖南農民運動の視察報告」、前掲『毛沢東選集』第一巻所収では確認できない。

38) Karl August Wittfogel, *ibid.*

39) *Ibid.*

40) *Ibid.* 今堀誠二によれば、中国革命史における農民の位置づけに対する毛沢東ら中国共産党のこうした「迷い」とは、「ブルジョア革命」という用語のもつ意味内容の混乱そのものから由来している。すなわち、「中共の中にはブルジョア革命の指導者について、ブルジョアを推すものと、これに反対するものが対立し、プロレタリア・農民の役割をどうみるかということでも、著しい混乱がある。農民革命の主張では、農民がヘゲモニーをもつのか否かが、明確にされていない。革命の対象となるものが何かを、具体的に（階級的に）指摘した理論は皆無である」（前掲『毛沢東研究序説』, 57頁）。中国革命史について論じられる際、この本質論的テーマが「一党独裁」体制下の中国においてのみならず、「自由主義」国家たる日本国内においてさえいまだに再検討されていない。このこと自体が、むしろ問題の深刻さを象徴しているというべきである。なお、この労働者と農民の貢献度をめぐる記述の「削除」問題については、石川忠雄『中国共産党史研究』（慶応通信, 1959年）, 100頁、及び藤井高美『中国革命史』（世界思想社, 1967年）, 90-91頁を参照。

41) Karl August Wittfogel, *op. cit.*, pp.1172-1173.

42) *Ibid.*, p.1174.

43) M. N. Roy, *op. cit.*, p.615 cited in *ibid.*

44) Edgar Snow, *op. cit.*, p.144 cited in *ibid.*, p.1174. 前掲『中国の赤い星』, 111頁。

45) Edgar Snow, *ibid.*, p.148 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, p.1174. 同113頁。

46) Conrad Brandt, Benjamin Schwartz and John K. Fairbank, *op. cit.*, pp.111-112 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, p.1175.

47) *Ibid.*

48) *Ibid.*

49) *Ibid.*

50) *Ibid.*, p.1176.

51) *Kuo Wen Weekly*, Vol. 5, No. 3, January 15, 1928 cited in *ibid.*

52) Ch'u Ch'iu-pai, *Chung-kuo ko-ming yu kung-ch'an-tang* (The Chinese Revolution and the Communist Party), Shanghai, 1928, p.127 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*

- 53) Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1177. 瞿秋白「中国革命与中国共産党」, 『瞿秋白文集（政治理論編）』（人民出版社, 1995年）, 421-422頁。
- 54) *Ibid.*
- 55) *Ibid.*, p. 1178.
- 56) *Ibid.*
- 57) *International Press Correspondence (hereafter Inprecor)*, English ed., Vienna and London, 1927, p. 1679 cited in *ibid.*
- 58) *Inprecor*, 1927, p. 321.
- 59) Mao Tse-tung, *Selected Works*, Vol. 1, New York, 1954, p. 66 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1179. 毛沢東「中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか」（1928年10月5日）, 毛沢東選集刊行会訳『毛沢東選集』第一巻（三一書房, 1956年）, 89頁。
- 60) Mao Tse-tung, *ibid.*, Vol. 1, p. 305 cited in *ibid.* 同98頁の註8)を参照。
- 61) *Ibid.*, Vol. 1, p. 67 and 73 cited in *ibid.* 毛沢東「井岡山の闘争」（1928年11月25日）, 同104頁。
- 62) *Ibid.*, Vol. 1, p. 92 cited in *ibid.* 同124頁。
- 63) *Ibid.*, Vol. 1, p. 100 cited in *ibid.*, p. 1180. 同133頁。
- 64) *Ibid.*, Vol. 1, p. 85 cited in *ibid.* 同116頁。
- 65) *Ibid.*, Vol. 1, p. 102 cited in *ibid.* 同135-136頁。
- 66) Karl August Wittfogel, *ibid.* なお, 毛沢東からの引用部分については, 同132-133頁参照。
- 67) *Ibid.*, p. 1181.
- 68) Mao Tse-tung, *ibid.*, Vol. 1, p. 66 cited in *ibid.* 前掲『毛沢東選集』第一巻, 86-89頁。
- 69) *Ibid.*, Vol. 1, p. 100 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.* 同133頁。
- 70) *Ibid.*, Vol. 1, p. 99 cited in *ibid.*, p. 1182. 同132頁。
- 71) *Ibid.*, Vol. 1, p. 82 cited in *ibid.* 毛沢東「党内のあやまった考え方の是正について」（1929年12月）, 同148頁。
- 72) *Ibid.*, Vol. 1, pp. 119, 121, 125 cited in *ibid.* 同161-175頁。
- 73) *Ibid.*, Vol. 1, p. 118 cited in *ibid.* 同164頁。
- 74) *Ibid.*, Vol. 1, p. 122ff cited in *ibid.* 毛沢東「一つの火花も広野を焼きつくすことができる」（1930年1月5日）, 同168-169頁。
- 75) *Ibid.*, Vol. 1, p. 128 cited in p. 1183. 同174頁。
- 76) Edgar Snow, *op. cit.*, p. 159ff cited in Karl August Wittfogel, *ibid.* 前掲『中国の赤い星』, 121頁以下参照。
- 77) *Inprecor*, 1931, p. 413 cited in *ibid.* なお, こうした労農同盟論をめぐるコミンテルンの「迷い」を, 革命運動の都市と農村における「不均衡」発展をめぐる



ネガ・ポジ論としてとらえた研究としては、蜂屋亮子『紅軍創建期の毛沢東と周恩来 — 立三路線再考』(アジア政経学会, 1978年), 108, 114-115, 154, 176頁を参照。

- 78) *Ibid.*, p. 1174 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1184.
- 79) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 80) Victor A. Yakhontoff, *The Chinese Soviets*, New York, 1934, p. 259 cited in *ibid.* ヤコントフ, 竹内孫一郎訳『中国ソヴェート』(東亜研究所, 1941年), 255-256頁。ただし, ここでのウィットフォーゲルの記述は邦訳では確認できない。
- 81) *Ibid.*, p. 217 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 82) Mao Tse-tung, *op. cit.*, Vol. 1, p. 129 cited in *ibid.*, p. 1185. 毛沢東「経済活動に気をくばれ」, 前掲『毛沢東選集』第一巻, 180頁。
- 83) *Ibid.*, p. 141 cited in *ibid.* 毛沢東「われわれの経済政策」, 同 198頁。
- 84) Victor A. Yakhontoff, *op. cit.*, p. 258 cited in *ibid.* 前掲『中国ソヴェート』, 252頁。
- 85) Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1189.
- 86) *Ibid.*, p. 1190.
- 87) *Ibid.*, pp. 1190-1191.
- 88) *Imprecor*, 1935, p. 831 cited in *ibid.*, p. 1191.
- 89) *Ibid.*, p. 1489 cited in *ibid.*

(いしい・ともあき 商学部教授)